生活文化史

Seikatsu Bunkashi

＜史料館だより＞

◇江戸時代の正寿寺（１）
新史料「社寺吟味帳」から…… 大国　正美（２）
◇深江在住音楽家の演奏記録について…… 有吉　康徳（７）
◇深江物語（13）
本庄小学校の話（１）…… 森口　健一（10）
◇深江の心象風景（3）
六甲山をめぐる人々…… 岡田　茂義（16）
◇『週報』と『家の光』の寄贈にあたり…… 田中　裕行（21）
◇史料館この一年を振り返って…… （27）
◇史料館日誌抄…… 道谷　卓（28）

2023.3.31
NO.51

元禄５年（1692）に尼崎藩に提出された「社寺吟味帳」の深江村分の写し。本山から正寿寺の寺号を授かったのは、これまで寛永 19 年（1642）とされてきたが、江戸時代初期の慶長年間まで遡ると書かれている（２～６頁参照）。

神戸深江生活文化史料館

江戸時代の正寿寺（1）

新史料「社寺吟味帳」から

史料館長　大国正美

はじめに

正寿寺の由緒については大正十年（一九二一）発行の『武庫郡誌』に詳しい記載がある。『本庄村誌』や、本誌の四九号、五〇号でも森口健一氏が正寿寺の創立過程を論じてきた。

これらを総合すると、中世に高橋川上流の四つ松川沿いの字薬王寺と字堂の後に、薬王寺という真言宗の寺と集落があった。文明十三年（一四八一）観空が蓮如上人に帰依して浄土真宗に改宗し、延寿寺となった。寛永十年（一六三三）に現在地に移り寛永十九年に本山から寺号を受けて正寿寺となり、その時の住職は永井三右衛門が出家して、空照と称して正寿寺の開基となった。正寿寺の「歴代住職忌日」（写真2）では開基は空昭とあり、一字違っているが同一人物だろう。二代以後は、恵空―龍音―理山―理伝―延寿―恵音―理円―円乗、明治以降は棘恵力―棘円准―棘信了―棘信勝住職と現在に続いている。また薬王寺の本尊だった大日如来を祀ったのが現在の大日霊女神社だという内容である。

ところが元禄五年（一六九二）の「社寺吟味帳」（当館蔵）という史料が見つかり、これまでの伝承と異なる正寿寺の記述がある。昭和十七年（一九四二）に『本庄村史』の編纂に着手した松田直市の筆写した史料である（本誌四四号参照）。筆写とはいえ正寿寺の来歴を語る年代の明確な史料としては最古のものであり、検討の必要がある。そこで本稿では元禄五年の「社寺吟味帳」を取り上げ、正寿寺の由緒を再検討したい。

元禄五年の「社寺吟味帳」の内容

松田直市の採集した「社寺吟味帳」は、墨書で表紙に「元禄五年申年十二月　社寺吟味帳　松田家」とある。当時の大庄屋打出村組に所属した十七カ村（打出・芦屋・津知・三条・森・中野のうち・小路・北畑・田辺・田中・岡本・野寄・横屋・魚崎・西青木・東青木のうち・深江）の寺社明細が村ごとに記載され、十七カ村目が深江村になっている。尼崎藩と幕府の入り組み支配を受けた中野村、大和小泉藩と入り組みだった東青木村も記載がある。深江村の記載と奥書、伝来の経緯は以下の通りとなっている。

深江村

一向宗西本願寺末寺正寿寺

京都常楽寺下　当看坊　空照

此寺開基之年暦相知不申候得共、本尊弥陀之画像、西本願寺九代目実如上人裏書有之を、天文年中正福と申僧安置仕、代々相伝仕候、八十年以前慶長年中之住持了順、二代目了喜、三代目正円、四代目当看坊空照ニ而御坐候、以前寺号無御坐候処、慶長年中本寺より木仏寺号申請候

一堂　梁行五間半　桁行九間　萱葺

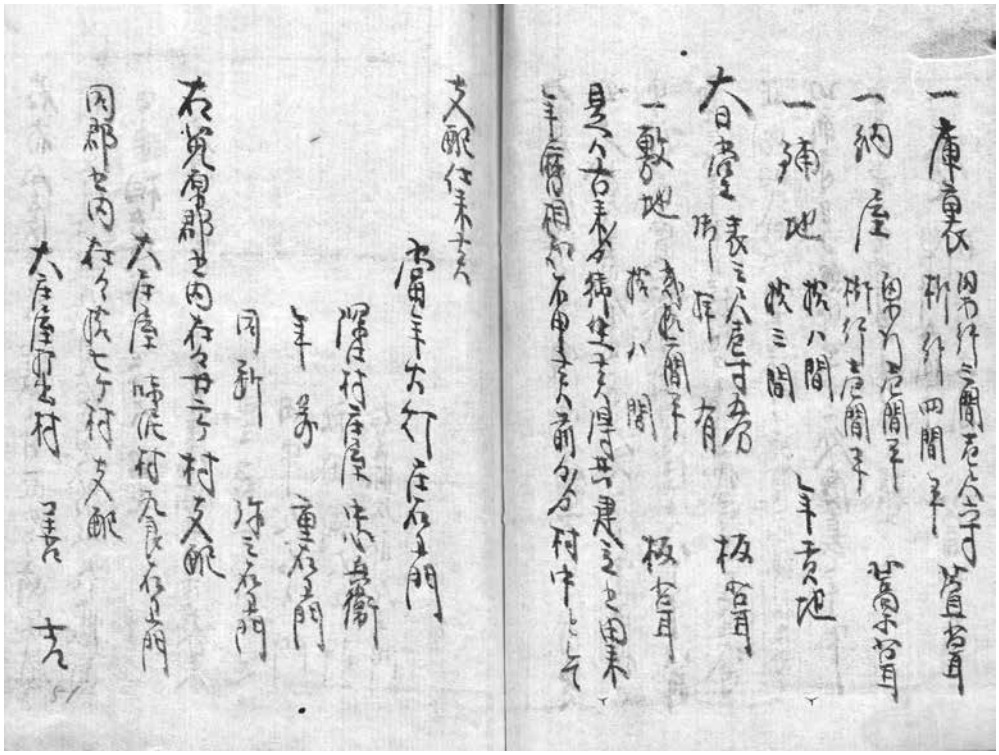
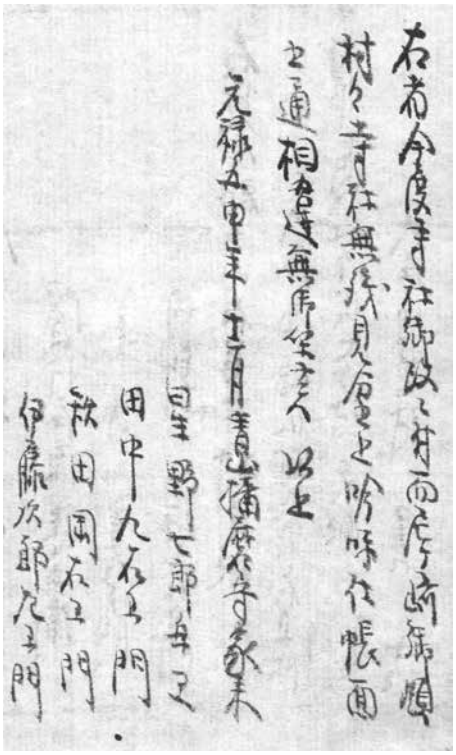


写真1　「社寺吟味帳」（後半、前半は表紙参照）

一庫裏　梁行三間壱尺六寸　桁行四間半　萱葺
一納屋　梁行壱間半　桁行壱間半　藁葺
一鋪地　拾八間　拾三間　年貢地
大日堂表三尺壱寸五分　御拝有　板葺
一敷地　弐拾二間半　拾八間　板葺
是ハ古来より御坐候得共、建立之由来年暦相知不申候、前々より村中として支配仕来候
当年火灯　庄右衛門
深江村庄屋　忠兵衛
年寄　重右衛門
同断　弥三右衛門
右菟原郡之内在々廿二ヶ村支配
大庄屋味泥村　九良右衛門
同郡之内在々拾七ヶ村支配
大庄屋打出村　善吉
右は今度寺社御改ニ付而、尼ヶ崎御領村々寺社無残見分之上、吟味仕帳面之通、相違無御坐候、以上
元禄五申年十二月　青山播磨守家来
星野七郎兵衛
田中九右衛門
秋田岡右衛門
伊藤次郎左衛門



元禄五年の「社寺吟味帳」は幕府によって広く調査されたもので、尼崎藩では個々の村から星野七郎兵衛ら御改奉行に提出され、その控えが三条村・芦屋村・西宮町に残っている。尼崎藩役人が現地を調べた上で大庄屋組ごとにまとめたのがこの冊子である。

また打出村に「三十二年以前寛文元年」など、一四カ村の寺社由緒に記載時から遡る年号の記載がある。原本の誤写が一件、後世の追記が三件あるほかは、すべて元禄五年から起算している。「社寺吟味帳」の末尾に松田直市は以下の記載をしている。

右社寺吟味帳、当地大庄屋高井与左衛門及郡家村大庄屋平野家ニ蔵ス、多少異同アリ、平野家蔵ニヨリテ写置、高井家蔵之モノハ保久良神社祠官猿丸氏之ヲ写ス、二者対照スヘキモノ也

以上のことから、元禄五年の年号のある「社寺吟味帳」は、打出組十七カ村の改帳で、明和六年（一七六九）から寛政十一年（一七九九）まで大庄屋だった高井家（野寄村）と寛政十一年から明治四年（一八七一）まで大庄屋だった平野家（郡家村）に伝来していた。このうち平野家伝来史料を松田直市が筆写したものが、当館蔵の元禄五年「社寺吟味帳」なのである。なお高井家に伝来した元禄五年の「寺社吟味帳」が本住吉神社宮司の横田家文書にも残されている（『野寄村誌』）。同書によると大坂町奉行所が尼崎藩に提出を命じたという。

食い違う正寿寺の由緒と初代住職

「社寺吟味帳」によれば、正寿寺の由緒は不明だが、天文年中（一五三二―五五）に正福という住職の時代に、本願寺の実如の裏書のある阿弥陀如来の画像を安置した。慶長年中（一五九六―一六一五）の住職は了順で、二代目が了喜、正円と続き、元禄五年の住職は四代空照であると記載されている。木仏寺号を受けたのは慶長年中了順の時代とする。

『武庫郡誌』と比べ、蓮如上人による文明年中の真言宗の改宗の記載がない。また本尊は阿弥陀如来の立像ではなく、本願寺九代実如上人の裏書のある阿弥陀如来画像であることなども食い違う。空照は「当看坊」とあるので、元禄五年の「社寺吟味帳」を作成した時点の住職は空照である。

江戸時代に浄土真宗の道場が正式な寺と認められるには、本山から寺号を免許される必要があった。寺号免許には「木仏寺号」と「御影寺号」があり、木仏寺号は本山が木仏（阿弥陀如来像）の裏書に寺号を書いて授与した。また御影寺号は、すでに木仏が

安置されている道場に親鸞・蓮如・顕如・准如（西派）・教如（東派）・太子・七高祖などの絵像の裏書に寺号を書き授与した。

木仏を与えられ時の住職が初代とするのは「社寺吟味帳」『武庫郡誌』とも共通しているが、慶長年間と、寛永十九年十二月十七日と食い違い、どちらが正しいのだろうか。

元禄五年から八〇年前は慶長十七年・十八年に当たる。西本願寺派の本願寺の「木仏之留」（千葉乗隆『木仏之留・御影様之留』本願寺史料集成、同朋出版、一九八〇年）には、この両年分と、寛永十八年から寛文二年までの分が欠落している。また寛永十九年の「御影様之留」では寛永十九年十二月十七日に多くの寺が御影寺号を与えられているが、やはり正寿寺の記載はない。従って「社寺吟味帳」と『武庫郡誌』の年代の違いについて、本願寺側の史料で真偽を確かめることはできない。

しかし「社寺吟味帳」は元禄五年に当時の住職空照や深江村役人が、尼崎藩の調査に応じて、過去八〇年を回顧して歴代住職を記載したのだから、寺号を受けた年代などは不確かでも、了順―了喜―正円という住職が実在し、何よりも空照が自らを四代目としているので、開基を自称したとは思えない。

だとすれば後世、どこかの時点で、了順―了喜―正円という三人の住職は正規の寺号を受ける前の住職で、四代目の空照を開基と考えられるようになったことになる。ではその変更はいつ行われたのか。

中古開基と称えられた七代恵音の功績

深江村の庄屋役を務めた永井家文書（永井喜代治氏所蔵）に「深江由緒書」という史料がある。文中に文化元年（一八〇四）の記載があり、このころまとめられた伝承と思われる。この史料に「正寿寺縁記」の項目があり、以下のように書かれている。

又永井山ハ深江其昔永井ニアリシ故ニ是ヲ用テ山号トス、其頃ハ村民老翁入道シテ替ル〳〵守護セリ、其後年ヲ経テ御宗門繁栄シテ草庵ヲ建立シテ住職代々勤メ給フ、又天明年中再建アリテ今ノ世ニ魏々タリ、住職追々替リ七代ノ住、釈恵音子ニ至リテ本堂再建ス、又自庵トナレリ、此ノ恵音子ハ中古開基ニシテ其勤功挙テ云ヘカラス

すなわち正寿寺が現在地に移転する前は、村人が出家して交代で守護していたこと、天明年間（一七八一―八九）に七代目恵音が本堂を再建し、自庵としたこと、恵音は中古開基と呼ばれる功労者としている。そして何より、恵音を七代目としている。正寿寺の「歴代住職忌日」では空昭を開基として恵音を七代目とするので、少なくとも「深江由緒書」が記載された文化

写真２　正寿寺暦代住職忌日
空昭が開基、７代恵音は中興開基
６代延寿は在職年数の記載がない

元年ごろには空照を開基とする由緒が固まっていたのである。

それはいつまで遡れるのか。松田直市が執筆した「本庄村史編纂　寺院の分」が残っている（当館蔵）。この中で松田直市は、天明年間の本堂再建について以下のように書いている。

其の後七代の住職恵音の時現在の堂宇が建築された。棟札写に、

天下和順　日月清明　風雨以時　災厲不起

当山七代住　恵音

棟梁　大和守門生　大工　吉右衛門

釿初　安永二巳年二月十七日

棟上　天明六午年六月廿四日終

深江正寿寺門生世話人　上田忠兵衛

庄屋　源次郎

新兵衛・善八・利右衛門・平五郎・惣左衛門・六郎兵衛

十助・茂左衛門・善左衛門・三右衛門―とある。

「棟札写に…」と書いていることから松田直市自身が棟札写を見ていて、棟札の写に恵音が自ら七代目と記載していたことが明らかである。残念ながら棟札の現物や松田直市の見た棟札写しは現存していない。

なお棟札写に記載された棟梁吉右衛門は「大和守門生」と名乗っている。大和守とは代々大和守に任じられた幕府大工頭中井家のことではなかろうか。門生とは門下生をさし、中井家で修業をしている大工と思われる。

おわりに

以上、正寿寺が木仏寺号を受け正式の寺院と認められたのは、元禄五年（一六九二）「社寺吟味帳」の記載では慶長年中の住職了順の時代で、開基とされる空照は四代目を名乗っていた。慶長年中とだけ記載しているのは、年号を確かめることのできる木仏は当時すでに伝来していなかったのだろう。空照は極めて長期間住職をしたことは明白で、正寿寺の基盤を作った功績は極めて大きい。

浄土真宗に改宗後は、村人が集団で惣道場を守護し、交代で出家した有力者が草庵を維持する時代、本山から正式な寺と認められ住職が補任された後も、寺の施設は惣道場と呼ばれ、村が中心に維持をした時代があったと思われる。

寺の歴史が大きく動いたのは中古開基と称えられる恵音の時代であった。それまでの村の惣道場から、恵音の自庵として新たな歴史が編まれるようになった。恵音の時代には慶長年中の木仏寺号の記録はなく、初代が了順という「社寺吟味帳」の記載が忘れられたのだろう。恵音時代に現存していた親鸞聖人の御影をもとに、寛永十九年寺号授与と考えられるようになり、その当時の住職空照を開基としたのではなかろうか。

正寿寺の「歴代住職忌日」には六代延寿は、忌日は記入されているが、ほかの住職のような在職年数の記載がない。次の代の恵音との間で、記録と記憶の断絶があるのかもしれない。

以上、本来なら開基を了順に変更したいところだが、積み重ねられた歴史も重い。正寿寺の開基は空照、了順は開祖と考えたらどうだろうか。

深江在住音楽家の演奏記録について

史料館研究員　有吉康徳

二〇二二年はロシアのウクライナ侵攻により、約一〇〇年前にロシア革命と内戦に揺れるウクライナから亡命してきた人々が住んだ「深江文化村」に改めて注目が集まる一年となった。五月二十七日に放送されたＮＨＫかんさい熱視線「亡命のウクラニアン　百年の記憶」において深江文化村が紹介されてからは、当館への来館者の数の増加とともに、深江文化村に関する問い合わせも増加した。

また、史料館では十月二十二日から十二月十八日までの間、企画展「文化村今と昔の写真展　ウクライナ・ロシア友好の原点」を開催し、深江文化村の写真を複数枚展示した。この企画展開催中に芦屋市在住の田中千尋さんから、深江文化村にゆかりの資料を寄贈いただいたことから、紹介したい。

今回寄贈された資料は、一九三六年六月十四日に大阪朝日会館で行われた京大オーケストラ定期演奏会のプログラムであり、副題として「オルガ・カラスロワ　滞日十周年記念」と記載されている。なお、公演は六月六日に京都朝日会館においても開催されている。指揮者はエマヌエル・メッテル、独唱は副題に名前のあるオルガ・カラスロワである。また、ヴァイオリンの演奏者の中にはエマヌエル・メッテルの弟子であった朝比奈隆の名前も見える。

エマヌエル・メッテルは一八七八年生まれ。ウクライナ出身の指揮者である。キーウィ、モスクワの歌劇場で指揮をした後ロシア革命を逃れてハルビンに移動、その後一九二六年から一九三九年までに日本に滞在。一九四一年アメリカで死去した。その間、京大オーケストラや大阪フィルハーモニック・オーケストラの常任指揮者を務めた。

一九三九年に日本を離れるまでの間、深江文化村の旧進藤邸に居住しており、家の前で撮影した写真が残されている。一九三四年版～三九年版『音楽年鑑』には、住所は神戸市外浜芦谷（屋）文化村となっている。深江文化村は芦屋文化村とも呼ばれたので、神戸市外浜芦屋文化村は深江文化村のことであ

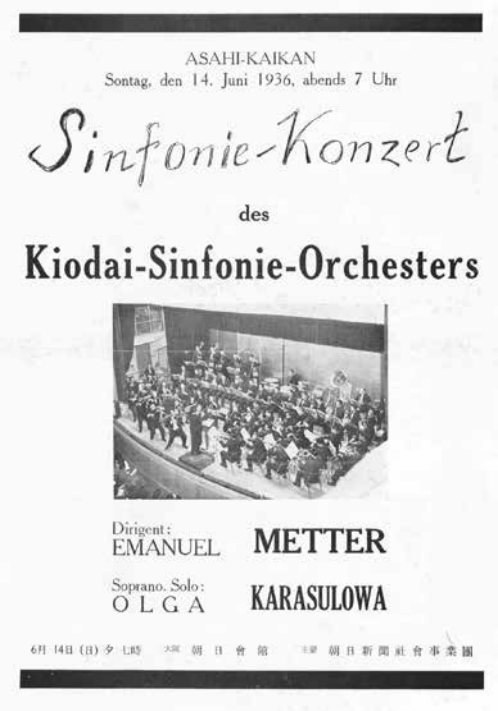


図１　寄贈された定期演奏会プログラム

る。また、妻でバレリーナのオッソフスカの住所は一九三五年版以降、神戸市外浜芦屋文化村一四二となっている。

オルガ・カラスロワは、『音楽年鑑』によれば一八六年二月生まれのロシア人。モスクワ帝室音楽学校を卒業。パリ音楽学校でも学んだソプラノ歌手である。フランスのモンテカルロ、パリ、ローマ、ペテルスブルクの各歌劇場で活躍後、一九二六

京大オーケストラ公演　（オルガ・カラスロワ　滞日十週年記念）

指揮　エマヌエル・メッテル

獨唱　オルガ・カラスロワ

歌劇出演者

小山登女（ソプラノ）
上村生以子（アルト）
藤堂顕一郎（バス）
野崎佳子（ソプラノ）
加藤榮（ソプラノ）
加藤貞子（メゾオソプラノ）

オルガ・カラスロワ女史略歴

モスクワ帝室音楽学校を最優秀の成績を以て卒業後、ロシヤ大都に於てステージに立つ事数回、後巴里へ赴き Cantoum 音楽院にて作曲家 Dr. Indy に師事すること年、同博士の紹介によりモンテカルロ、オペラハウスにて卒業後最初の演奏契約をなす異例の栄冠を得ふに至る。一九一一―一九一三年英国地に於て、カルゾー、バイオスチュ、ライトウ、マルチオオリ等の大音楽家と共に名聲高くうたわるものあり。昭和三年極東の地に第一歩を印し、新進の俳姿を以て独唱会を開催して喜聲を博す。爾来本邦に止ること十年、本日此処に在日十週年を記念する事は本邦の愛増にとつて有意義なる事と思ふ。尚歌劇に出演の方々は女史の門下である。

Mitglieder des Orchesters:

I. Violine:
田中平三郎教授 Prof. H. Tanaka
朝比奈　隆 T. Asahina
直木　力 T. Naoki
吉村一夫 K. Yoshimura
松浦左近 S. Matsuura
藤原正明 M. Fujiwara
筧砂彦一 H. Masago
金本　薫 K. Kanemoto
三上治一郎 G. Mikami
駒宮末造 S. Komamiya
沼光祿 K. Numa
井上見 A. Inoue

II. Violine:
荒木元秋 M. Araki
山口都雄 K. Yamaguchi
小武内陽平 Y. Obunai
山田清造 S. Yamada
田中哲郎 T. Tanaka
牧島一生 K, Makisima
樋口素一 M. Higuti
今井正善 M. Imai
千葉　寛 H. Tiba
丸山孝雄 T. Maruyama
蘇　景明 K. So
北瓜陸夫 T. Kitazume

Viole:
椿　榮 S. Tubaki
長廣欽雄 T. Nagahiro
櫻井憲一 K. Sakurai
藤澤　詮 A. Fujisawa,
池浦孝雄 T. Ikeura
三輪　孝 T. Miwa

Cello:
中村　陸 T. Nakamura
更井恒夫 T. Sarai
月本一蹟 K. Tukimoto
林　天鵬 T. Rin
小川　昂 T. Ogawa
小河原公岡 K. Ogawara
桑原　宏 H. Kuwahara
内藤夏五 N. Naito

Bass:
松原久之 H. Masubara
古武彌久 Y. Kotake
今西英造 Z. Imanishi
渡邊良哉 Y. Watanabe
増田信一郎 S. Masuda

Harfe:
高野眞義 M. Takano

Floete:
工藤久雄 K. Kudo
山田忠男 T. Yamada
山内直三郎 N. Yamanouchi

Piccolo:
山内直三郎 N. Yamanouchi

Oboe:
吉田長二郎 T. Yoshida
新宅　孝 T. Shintaku

Klarinette:
中島理一 R. Nakajima
麻生　茂 S. Aso

Fagott:
大田憲雄 N. Ota

Horn:
山内　茂 S. Yamauti
馬淵　治 O. Mabuti
三宅伊三郎 I. Miyake

Trompete:
竹岡武夫 T. Takeoka
笹野一男 K. Sasano

Posaune:
山口齊治 S. Yamaguchi
瀬山　勇 I. Seyama
向江久江 H. Mukae

Tuba:
陶山一致 K. Suyama

Pauken:
淺井安雄 Y. Asai

Scnl. Inst.:
高橋清興 S. Takahashi
岡田陸雄 T. Okada
三木順一 J. Miki

図２　プログラムの中面のメッテル（右）カラスロワ（左）。ヴァイオリンに朝比奈隆

年に来日し、新交響楽団の歌手としてだけではなく、宝塚音楽歌劇学校教授も務め、声楽の指導者としても活躍していた。

一九三三年版～三九年版『音楽年鑑』には芦屋在住、一九四〇年版～四二年版では本庄村深江七七一在住となっている。芦屋市が誕生するのは一九四〇年のこと、それ以前は精道村で、『音楽年鑑』に芦屋在住とあるのは、実際は深江であったのではないか。芦屋市の誕生により紛らわしくなり、本庄村深江七七一と住所表記が変更されたのではなかろうか。なお、戦後の深江の地番図によると、深江七七一は現在の深江南町四丁目一二番地あたりと推定され、深江文化村から西に離れた場所である。一九三八年頃の深江の住居図では、深江七七一の付近に「白系ロシア人」の記載があり、オルガ・カラスロワを指している可能性が高い。

1938 年ごろの大日神社～海岸の住居図
南北通りは稲荷筋
西五辻男爵邸の東に白系ロシア人の家

第二次世界大戦後、オルガ・カラスロワは一九五〇・一九五一・一九五五年版の『音楽年鑑』には神戸市生田区山本通三の一〇一在住、前宝塚音楽歌劇学校教授とあるが、一九五六年版には名前がなく、その後の動向は不明である。オルガ・カラスロワについては、深江文化村の旧坂上邸に居住していたという話もあり、その実態や時期について引き続き調査にあたるとともに情報があればご連絡いただきたい。

これまで当館は、深江文化村ゆかりの所蔵品としては、富永家に残されていたブックエンドやフライパン等の生活用品しか所蔵していなかった。今回寄贈いただいた資料は、深江文化村が「関西洋楽のふるさと」であったことを示す証跡として大変貴重である。当館にご来館いただいた際は是非ご覧いただきたい。

【参考文献】

山形正昭「芦屋「文化村」の記」『大阪芸術大学紀要〈芸術〉』六、一九八三年
小野高裕『古き佳き芦屋の音楽ロマン』一九九二年
小野高裕『芦屋文化村物語』一九九四年
岡野弁『メッテル先生』リットーミュージック、一九九五年
本庄村史編纂委員会『本庄村史歴史編』二〇〇八年

深江物語（13）

本庄小学校の話（1）

深江塾　森口健一

はじめに

今回は深江のまちの数ある施設のうち、正寿寺や大日神社に次いで古い歴史を持ち、人々になじみの深い本庄小学校の物語である。この物語を記するに際しては、本庄小学校の公式記録『本庄国民学校沿革史』や『本庄小学校同窓会誌』（創刊号、八十周年記念誌など）、昭和十三年卒業生文集を主な文献として参考にした。また昭和二十年以前の卒業生や、筆者の同級生や後輩の昭和三十年代から四十年代の卒業生からも直接聞き取りも行った。取材に際してご協力いただいた方々については、文献と共に最後に一括して記す。

なお、小学校の公式記録『本庄国民学校沿革史』は昭和二十年（一九四五）五月十一日の空襲によって戦前の分が焼失し、昭和二十一年六月五日に、当時の藤田幸伸校長が再編成した。従って戦前の記述は極めて簡略になっている。

写真１　深江小学校時代の地理の教科書

「本庄小学校の話」という題名は、取材した言葉や文章を物語風に記述したことからつけた。本稿は、まず主として時系列に沿って戦前の学校の移り変わりを記した。

学校創設―深江小学校と青木小学校

明治二十二年（一八八九）までは本庄村は深江村と青木村、西青木村に分かれていた。学校の前史としてはそれぞれに寺子屋があったが、明治五年（一八七二）まず深江の正寿寺に深江小学校、さらに明治六年に青木の無量寺に青木小学校が出来た。深江小学校時代の教科書が史料館に残っている（写真1）この頃の小学校は、未だ義務教育ではなかった。明治十九年（一八八九）国によって小学校令が定められて、尋常小学校が四年間の義務教育となった。

明治二十二年に深江村と青木村・西青木村が合併して本庄村となると、学校の統合が構想され、明治三十二年四月十日には、本庄村はかつての深江村と青木村のほぼ中央の地（現在の本庄小学校所

写真２　明治後期の本庄尋常小学校。校門には裁縫学校の看板もあった

在地）に本庄尋常小学校を設立することとした。直ちに校舎の建築にかかり、明治三十三年三月三日には校舎落成式が挙行された。神戸市立本庄小学校は、この落成式の日をもって創立記念日としている。なお、尋常小学校には明治三十六年に本庄裁縫学校という名の裁縫科が併設された。

初代の小学校の校舎は木造平屋建てで校舎玄関は建物のほぼ中央、校門は校庭の南にあった。校門の左右、向かって右に本庄尋常小学校、左に本庄裁縫学校の名前が書かれていた（写真2）。創立の三年後には、高等科がおかれて本庄尋常高等小学校となった。

写真３　本庄尋常高等小学校の前の忠魂碑

大正元年（一九一二）に、校庭の西寄りに日清、日露の戦役で亡くなられた方の慰霊のため忠魂碑が在郷軍人の人たちによって建てられた（写真3）。『本庄国民学校沿革史』には「大正元年十月三十日校庭西側ニ東面シテ老松ノ茂ル南側ニ忠魂碑ヲ建設シソノ除幕式ヲ盛大ニ挙行ス」と記録されている。

二階建て木造校舎と鉄筋校舎

大正九年（一九二〇）七月十二日、校庭の拡張と共に木造二階建ての新校舎が完成した（写真4）。上棟式は同年三月四日でその様子は「木造二階建本館ノ上棟式ヲ挙グ。形式上南ヨリ見レバ偉観ヲ具備」と記録が伝えている。同時にそれまでの校庭が東に三一二坪（約一〇〇〇平方㍍）広がった。

大正十二年の地図を見れば、学校の南は西国浜街道を隔てて松林が広がっていた。「摂津名所図会」にも描かれ、里歌にも歌われた「踊松」である。校庭が南に拡張されるまでは、このあたりには小規模ではあるが墓地があったそうで、校庭拡張工事中には、幾つかの骨壷が出てきた。それらの骨壷は素焼きの蛸壺のようなもので、その多くは破損していた。

昭和四年（一九二九）四月十五日、校庭の西端に既存の木造校舎に接して鉄筋二階建ての八教室を持つ校舎が増設された（写真5）。この校舎は昭和天皇御即位記念事業と

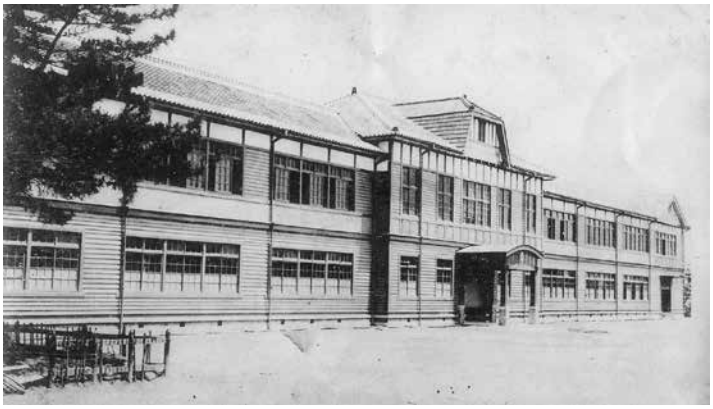


写真４　大正９年完成の本庄尋常小学校

写真５　左手が室戸台風時に避難した鉄筋の建物
（1930 年２月 17 日、本庄小学校提供）

して建設されたものである。昭和九年の室戸台風時には、児童たちが先生たちにあるいは抱かれ、あるいは手を引かれて、二階建て校舎に避難した。お蔭で全員が無事であったことは、幸いな記録として伝えておくべきである。

西国浜街道を隔てて学校の南に本庄村役場が、校舎同様に御即位記念事業として新築された。完成は昭和四年四月十四日の校舎完成の一日前のことである。この村役場は、本庄村が神戸市と合併後は、昭和三十三年から本庄公民館として住民に利用されていたが、平成四年（一九九二）解体された。

昭和四年の春、第一三代校長として岩谷省三先生が着任された。先生は道徳修身の先生でもあり、昭和四年から昭和十六年まで在職された。二、三年で転勤交代のある校長先生の任期としてはめずらしいことである。この間に昭和八年には「給食場ヲ設置シ貧困児童ノ給食」を実施された。この頃、我が国は昭和大恐慌の影響下にあり、弁当を持って来られない所謂「欠食児童」が本庄にも少なからずいたという。また、校内に医務室を設置し、夏には深江浜にて水泳練習を開始し児童の健康増進に注力された。

卒業生が語るのは、なんといっても先生の強い要請によって昭和十二年新築の三代目の校舎屋上に「五輪の塔」が建てられたことだろう（このことについては後に詳述する）。岩谷省三先生はその後、精道小学校の校長を経て、昭和二十年本庄村村長となった。遺徳を偲んで教え子たちが立てた墓は、今でも本庄小学校北にある本庄墓地の中にある。

室戸台風

昭和九年（一九三四）九月二十一日の朝七時過ぎ、気象観測史上最強といわれる室戸台風がこの地を襲った。

「昭和九年九月二十一日午前七時頃ヨリ…高潮ニ遭ヒ教室、運動場亦海水ニ洗ハレ…机、腰掛等浮キ流レ始メタルタメ…登校セシ児童ヲ辛ジテ西鉄筋校舎ニ誘導シ…無事ナルコトヲ得タ」と学校の記録にある。

写真６　室戸台風当時の
深江南町４丁目附近

この記録にあるように台風は暴風もさることながら記録的な高潮があった。高潮の様子を当

時の児童が作文に残している。

「校庭が大きな池のようになったようで、用務員のおじさんが胸まで浸かっていたのを見た」

水位が一メートルに及ぶ高潮であったことが推測できる。学校の南は、松林と葦の葉が茂る平坦な地が海辺までと続いていたから、高潮は海からさえぎるものなく校庭や校舎に押し寄せた。

後に漁師になった男性も以下のように書き残している。

「地引網の大きな船が…札場通りの阪神の踏み切りを越えて氷会社のほうまで北のほうに流されていった」

地引網の船は、現在の深江南町から深江北町、本庄町付近まで札場通りを波に乗って流れていった。舟は海岸にある浜戎神社のあたりの浜辺に引き上げられていたものだろう。

浜戎神社あたりの台風後の様子が写真に残っている（写真７）。深江の漁師の中には、高橋川に繋留している持船の様子を見に行って波にさらわれた人もいた。その人は、船から波にさらわれて沖に流されていった。ところが風向きが変わって、南よりの風と南から押し寄せる波が、その人を浜辺に運んで高橋川の東の浜辺に打ちあげた。大きな怪我もなく奇跡的に助かったそうだ。

写真７　室戸台風後の浜戎神社付近

本庄自慢の鉄筋校舎

昭和十二年（一九三七）三月三日、鉄筋三階建て校舎の竣工祝賀会が開催された。三年前、昭和九年の室戸台風の被害の経験を教訓にした建物である。それまであった二代目木造校舎は、建てられた大正時代は遜色ないものだったが、昭和の時代になってからは、「近隣の学校に比べて貧弱だ」と、児童も親たちも「肩身の狭い思いがあり、学校に対して誇りを持つことができなかった」と思い出として語っていた。この児童の言葉は、当時の教員であった中島実先生の「児童を引率して他校を訪問したときの児童の表情にそれが表れていた」という話と重なる。そのため、三代目のこの校舎の完成は村を挙げての喜びだった。

写真８　五輪の塔を持つ本庄小学校

この新しい校舎には屋上に避雷針が建てられた。この避雷針の鉄柱には水平に約一尺（約三〇㌢）の間隔をあけて五つの輪が取り付けられた（写真8）。後に本校のシンボルとなる「五輪」である。この塔「五輪」は、道徳修身の先生でもあった岩谷省三校長先生の強い意向が反映されている。普通の避雷針よりも強度も必要だし、輪の制作費も必要である。村の財政の問題からも「五輪」設置反対の声があった。しかし、避雷針を「五輪の塔」とすることを先生は強く希望した。この「五輪」は、中国の古典にある「五常」「五倫」の道徳的な意味が表現されている。「五輪の塔の意義」に賛同した深江の篤志家の方々が塔の設置にあわせて「二宮金次郎」の石像を寄贈した。篤志家の氏名は像の後ろに刻まれている（藤川祐作「本庄小学校の二宮金次郎像」『生活文化史』第四一号号参照）。

「二宮金次郎」は昭和二十年代にはお札にもなった「二宮尊徳」の幼名で、五常五倫の実践者であることでも知られている。非常に幅広い活動をされた人徳者で、かの「報徳学園」は尊徳翁の教えを学ぶことで知られている。五輪の塔と二宮金次郎像は一組で本校の教育理念を表現すると同時に、学校と地域の願いや思いが一つになったまさにシンボルである。

戦争体験

昭和十六年（一九四一）十二月八日に、我が国はハワイの真珠湾攻撃と共に、米英に対し宣戦布告をなし完全な戦時体制に入った。この年の四月には全国の小学校は国民学校と呼称変更した。本庄小学校も例外ではなく本庄国民学校となった。

本庄国民学校の児童は、昭和二十年に入ると共に始まった米軍による当地への空襲から逃れるために、深江の地を離れ「疎開」していった。疎開先は兵庫県の播磨地方の、いわば過疎地にあるお寺だった（写真9）。集団疎開とは別に、空襲の目標から外れそうな土地に親戚のある児童は、個別に「縁故疎開」が行われた。（戦争と疎開の体験については拙稿「深江にあった戦争1～3」『生活文化史』第四六～四八号参照）。

写真9　神崎郡の寺院での疎開（『神戸の百年』所収）

昭和二十年（一九四五）当時、本校の南の海岸に川西航空甲南工場という海軍の飛行機を製作する大きな工場があった。この工場を目標に米軍のB29という超大型の爆撃機による空襲が本庄地区にもあった。

深江における空襲体験は昭和二十年五月十一日の爆弾攻撃と、六月五日、八月六日の焼夷弾による空襲である。これらの空襲で深江地区の住宅の大半は破壊され焼失した。ちなみに、東灘から阪神間にかけてのこれら空襲の惨禍を描いた物語に、有名な

写真 10　空襲を受けた本庄国民学校

野坂昭如『火垂るの墓』（新潮文庫他）がある。本校被害の大半は、五月十一日の爆弾攻撃によるものである。この日の空襲はB29爆撃機からの二五〇キロ爆弾によるもので、建造物破壊を目的としたものである。本校も十数発の爆弾を受けた。

この日の空襲の様子は、かなり詳細な公式記録として残されている。以下は、その記録の抜粋引用である。

「五月十一日午前十時半過ぎ警報下に敵B29十数機が西南方の白雲中から突如下向姿勢を見せた。直ちに運動場警備員の中島実訓導から敵機襲来、退避を絶叫…役場の吏員中、学校に避難していた二人の女事務員はその場で即死していた…勅語謄本等を護持した巽節子訓導は之を前胸に固くしばって壕より六甲山方面に避難した…やがて二階中央部より火を発したが水一滴出ず…ついに校舎の中央部を焼失した」（原文はカタカナ混じり文）

「二階中央部から火を発し…校舎の中央部を焼失した」という中央部は講堂のある場所であり、その屋上には東西に二本の五輪の塔がたっていた（写真10）。講堂の屋根は焼けたので戦後も永らくその傷跡が残っていた。雨漏りもあった。この講堂はその後も台風のたびに屋根が破損し、校舎の被害を一手にひき受ける役目を担っていた気がする。

空襲の中、「勅語謄本を胸に抱いて避難した」とある勅語謄本は校舎の南にあった奉安殿に納められていた（写真11）。校庭には奉安殿の西に隣接して馬に乗った楠木正成公の像もあった。奉安殿、楠公像は忠魂碑とともに昭和二十一年秋より順次無くなった。

続く後編は阪神・淡路大震災までの「昭和時代の本校の歴史を中心の記述」と、「老松と忠魂碑」「校歌と五輪塔」「二宮金次郎像」などを予定している。

写真 11　奉安殿の前の岩本校長（左）
中央は松井善太郎町長

深江の心象風景（3）

六甲山をめぐる人々

筆者　岡田茂義

十一、六甲の山並と「青い山脈」

北を見れば六甲連山の山並みが展望される。南に淳茅（ちぬ）の海。昔の深江の地は風光明媚な所であった。この曲の作者、服部良一もこの六甲連峰に魅せられた。青い山脈の曲は服部良一が阪神電車の車窓から見た六甲山の山並みを楽譜にした。

「戦後間も無い車内は闇屋や買出しで混雑していた。」と彼が云ったのを憶えている。

処が、週刊新潮平成七年八月夏季特大号に依ると、「青い山脈の記念碑が群馬県の吉井町の牛伏山に建っている。青い山脈と云えば、石坂洋次郎の小説を西条八十作詞、服部良一作曲」の記載がある。牛伏山の頂上に立った服部さんは「素晴らしい展望だ。僕が作った青い山脈のイメージにぴったりだ」と云った。吉井町の人々が「山脈の会」を作って碑を建てた、と同町商工観光課の山田稔課長の話。

然し飽くまで、服部良一の見た山並みは六甲山であったことをここに明記する。

註

予てより青い山脈は六甲山であるという事を確信していたが、この度、平成十年六月五日付テレビ朝日（一〇チャンネル）午後九時の「驚きもの木二十世紀・名曲誕生に感動秘話」に服部良一が西條八十作詞の「青い山脈・雪割れ桜…」を車中より見た六甲山の深い印象とその感動を以て、昭和二十三年に作曲したものである、との一節を確認した。

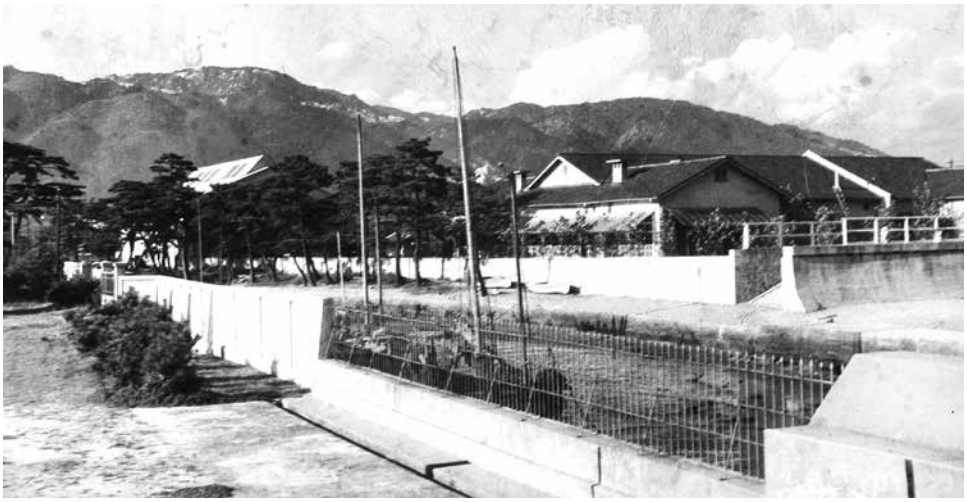


写真１　高橋川下流からみた六甲山の山並み

服部良一が牛伏山より連山を眺めて「青い山脈そっくりだった。」と云ったとしても作曲とは関係の無い事であり、六甲山を見ての事であるのは変わりは無い。「青い山脈」はどこまでも六甲山である。

服部良一は十六才の時より大阪シンフォニー・オーケストラのメンバーとし

て所属しており、当時より既に作曲を手懸けていた。而も西條八十のものが多い。蘇州夜曲もそうだ。他の曲と共に一世を風靡する名曲とされて一流の歌手が競って唱い、更に映画にもなり劇にもなった。

十二、二楽荘

平成六年六月二十九日、禮子、誠子と商用のため六本木のジェトロへ行き、帰りに青山の料亭「穂積」で昼食を摂った。その時、大きな赤い山桃が料理に使われていたのを見て、これを契機として、神戸本山の山桃の樹が群生繁茂していた山とそこにあった二楽荘の話をした。この山桃の樹の群生の山は麓から隣接している位置で、下から見るとこんもりした形の山の色が緑濃く他の山並みと判然と区別される。

写真２　二楽荘本館（『二楽荘写真帖』1912 年、和田秀寿氏提供）

写真３　二楽荘本館（同）

この山の中腹に西本願寺の大谷光瑞師の発想による二楽荘があった。印度、或いはアラビアの寺院を模したものであろう。円形の塔柱があり、タイルを敷き詰めた大広間に矩形（くけい）の大きな池が水を湛えており、睡蓮が浮かび鯉が泳いでいた。

麓から山道を二楽荘まで登ったら、そこにインクラインが設置されているのを見た。インクラインと云えば、京都に非常に関係のあるもので、明治初年東京に遷都されてより京都も時代に遅れないようにと特に文化の進歩に力を入れた。その一つとして琵琶湖を利用すべく、その水を京都に引入れる構想であり、その為に東山にトンネルを造る大工事を行い見事完成させ、水運のための船をインクラインという新知識を以て上陸させて運送の便をはかった。

この構想を光瑞師は直ちに二楽荘に応用した。二本の細いレールの上にトロッコが乗っていて、引上げるワイヤーが付いている。今のケーブルカーである。当時はインクライン（傾斜用カー）と云った。光瑞師は印度の虎狩りで有名であるが、第二十二代御門主（鏡如上人）である。

併せて、西本願寺一族の大谷光明師のゴルフの業績の一つを書く。昭和六年、彼が川奈の富士コースを造っていた時に、偶々ゴルフ場設計で有名なアリソンがホテルに泊まっていた。これ幸いとコースの一部を設計してもらった。アリソンはアリソン・バンカーとして、難しいバンカーを造るので知られている。このコースにも二、三ヵ所この型（グリーンの真下にバンカーがあり、上のグリーンの端が顎（あご）の様にバンカーに張り出している）のバンカーが存在する。

写真４　二楽荘第一ケーブルカー（同）

アリソンはこのバンカーを全国で三ヵ所造った。東京倶楽部（朝霞）と広野と川奈である。東京倶楽部は元々駒沢にあった東京倶楽部で一般の交友倶楽部として存在したので特にゴルフの名称は付けていない。朝霞に移ってからも「東京倶楽部」を継承した。処が、戦時中ここが陸軍の飛行場に徴収され、今の東京ゴルフ倶楽部の場所に移り、この時よりゴルフの名称が付け加えられた。

我孫子にも相模にもこの型のバンカーはあるが、何れも上記三ヵ所のものを真似（まね）て作ったものである。

川奈のコースに戻る。平成三年（一九九一年）未年（辛未（かのとひつじ））の正月、年男として川奈大島コースを廻る。坂道の連続で難渋してスコアは悪かったが、4番の good-bye ホールは右寄りに見事に打って谷を越した。又6番 s.o.s ホール（147ys）は更に深い谷（左寄りには海水が進入している）を越して直接グリーンを狙い、one-on させた。ブリッジを渡りグリーンに行けば、見事乗っていた。

然し、ブリッジを渡って戻っての次のホール7番 Ohtani's smile では前面の谷（6番の谷の延長）に残念乍ら落としてしまった。大谷光明師はこの難しいホールを見事 one-on させて思わず微笑した。これがこのホールの名称となった。更に次のショート・ホール Twin（117ys）で前面にアリソン・バンカーがあるので左へ打ち、セカンド・ショットを右にあるアリソン・バンカーを避けて、左の土手に向けて打ち、クッションを取り、

グリーンに乗せたが右傾斜のグリーンの為、遂に右奥のアリソン・バンカーに落ちる結果となり、顎のある深いバンカーで四打を叩いてしまった。つくづくアリソン・バンカーの難しさが身に滲みた。

十三、武庫山―通称甲山

①神功皇后が九州の熊襲を討ち、更に竹内宿祢とはかって海を渡って新羅の都城に攻め入り国王を降伏させ、百済・高句麗をも帰服させて引き上げた。所謂三韓征伐である。その時の戦利品である武器を武庫山に納めて戦勝を祝福した。

これは記・紀の記事によるものであるが史実性が少なく伝説的であるとの評がある。（平凡社世界大百科事典）

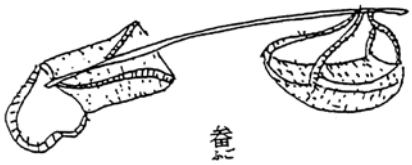
尚、武庫と呼ぶ由来は奉納した武器の倉庫のことであり、甲（兜）は山容が甲の錏の形をしている所に語源がある。而も甲山については地殻の底から押し上げてくる火山噴出の力が六甲山の花崗岩層で押さえられ熔岩が甲の錏の形で固定安定した。この花崗岩層の結晶が脆く次第に白砂となって流れて行き、あとに硬い岩質の甲山の見事な山容が残り、麓から極めて近い目の前にこの山容を見ることが出来る。

②船弁慶、能の課題である。義経は頼朝との不和のため都落ちして摂津大物の浦より船で西国に亡命せんとした時に、俄に風が変わって、武庫山、譲葉が獄よりの強風により難航しだした処に、平知盛を初め平家の一門現れ出でて怨みを晴らさんと襲いかかってきたが、弁慶は東西南北中央の諸佛に祈りをかけて平家の追手を追い払い、漸く船を汀に漕ぎ寄せた。

十四、三田への六甲越え

深江から六甲山を越えて行く山道の「魚屋道」は有名であった。神戸からの有馬道はあったが阪神間ではこの道だけだったのかもしれない。西宮からなれば、寧ろ宝塚に出て有馬を経て三田へ行く道を選んだのだろう。深江は漁場である。大阪湾で獲れた魚類を天秤棒で担ぎながら山を越す。それについて母ゑいから聞いた話が面白い。

天秤の片方は荷物、反対の片方に畚（広辞苑―竹・藁で編み、物を盛って運搬する具）をぶら下げてその中にまだ小さかった自分が入れられて担がれる。時には担いでいる者が肩を替えるために載っている畚が谷の上にかかる。下は千仞の谷だ。恐ろしくて思わず声を出したそうだ。然し、こうしても母は自分の母おいくさん（私の祖母）の郷を訪れたかったのであろう。祖母の郷は日西原の渕上の姓であった。


畚

渕上家は神戸への往復がよくあった様で有馬道を通った。時には狼が後を付けて来る。若し、躓いて転べば忽ち襲いかかる。そんな危険が度々起るのだが、その時は、早速帯を解いて片方を確り持ちながら地に落し、長く延ばして歩いて行く。身近に付いて来た狼は長い帯の端まで遠ざかる。若し、転んだ場合でも起き上がる間をここに作る。色々危険を冒しながら六甲山を越したと聞かされた。

有馬道の事はさて置き、深江からの六甲越え魚屋道に戻り、そこには紺屋の前栽と云う見所があった。

十五、紺屋の前栽―庭のこと

深江の旧道の北側に木下理髪店があり、その奥に磯野萬治郎さんのお宅があった。更にその奥辺りにこの紺屋（紺屋の白袴と云う様に）の藍染め屋があった。名前は思い出せない。この人が藍染めの商売で、三田との往復をいつも魚屋道を通っており、今は芦屋ゴルフ場の区域になっているが、岩間を通り抜けると、一面に開け奇岩を置き並べた様な広場が展開される。その岩と岩との合間に松の木が低く平伏した恰好で美観を添えている。嶮しい坂を登り、岩間を抜けた途端に開ける美観を彼はつくづくと眺めて、同時にこの景色を自分の住まいの庭に持って行きたいと念願し、又、人にも語ったのであろう。それでこの山の景色を人々が紺屋の前栽と云うようになった。

ゴルフ場開発のために、この風景も取壊されただろう。

十六、母「ゐい」を昔はどう発音していたか

平成六年二月に、サッポロビールがその昔のエビスビール工場の広い跡地に、ガーデンヒルズという総合開発事業を計画し、分譲棟の一号館の販売が開始されてその案内書が届いた。

その物件の表示に Yebisu Garden Terrace の文字が使われている。恵比寿の発音は日本語本来のわ行の発音を基準として、その表示を定めたのであろう。

それについて、祖父、正蔵は娘ゐい（私の母）を呼ぶ時は「おいえい」と云った。これが正式のゐの発音だと私達は面白く聞いた。wをきかせて「おうえい」が正当だろう。ゐは「うい」で、をは「うお」と発音するべきだろう。

当時、土佐の地方もこのわ行の発音が守られていた様だ。息子を京都大学に入れて将来の出世を望んでいた父親が、夏休みに帰省した息子のわ行の発音が通俗化し乱れていたので、自分は苦労して京都大学まで入れたのにこんな事になるとは、と嘆いたそうだ。

尚、母ゐいは明治十二年正蔵、いくの長女として生れ昭和六年に亡くなった。

魚屋道（「六甲摩耶再度山路図」前田康男氏蔵）

『週報』と『家の光』の寄贈にあたり

筆者　田中裕行

はじめに

四二年間勤めた神戸市役所を昨春、退職し、長年の懸案だった実家（三木市）の古い納屋の収納品の片付けを行った。薄暗い納屋の中には昔の農機具や、法事用の食器類にまじり書棚があり、私の祖父（庄太郎）が読んでいた本が並んでいた。その一部が今回、当館に寄贈させていただいた『週報』一一八冊（昭和十七年一月二十八日号～二十年二月二十一日号、写真1）と『家の光』七九冊（昭和十年十一月号～二十年一月号）である。

前者は戦時中、内閣情報局が毎週発行し、その時々の国際情勢や日本軍の戦闘状況、内政の課題、新制度などについて記された約三〇頁の小冊子である。一冊五銭だった。

写真１　『週報』

後者は産業組合中央会（現：農業協同組合）が発行する約二三〇頁の月刊誌で、「一家一冊万能雑誌」と呼ばれ、生活の修養面、時事解説、小説、健康法、子育てなど内容は多岐にわたる総合雑誌である。普通版と都市版があり寄贈品は都市版である。一冊二〇銭だった。

戦前から戦中の史料として、まとまりがある出版物なのでどこかに寄贈し役立てていただければと考えていたところ、以前、私が仕事の関係でお世話になった大国正美館長から当館で受けてもよいとのお話をいただき大変、感謝をしている。また、この史料館だよりで本史料を紹介する機会を与えていただき二重に感謝をしている。

一、『週報』の紹介

週報の記事の中で、特に国民生活に関わりの深いと思われる「常会の頁」と「通風塔」を取り出してその内容を紹介したい。

1「常会の頁」

週一回、発行される週報の紙上で、月一回定期的に掲載されていたのが「常会の頁」である。常会は、集落単位で全所帯参加のもと必ず毎月十日までに開くことが求められていた。政府として、その時々、全国民に周知・徹底したい方針や取組内容が「常会の頁」に書かれている。

◆第二八一号（昭和十七年二月二十五日）

大東亜戦争完遂　翼賛選挙運動

前年、議員任期を一年延期したことを受け、四月三十日に衆議院の総選挙が行われる。総選挙を機会に大東亜戦争完遂の決意を新たにしよう。最も大事なことは戦争の大目的にそって、

真に聖業をする人材を議会に動員することが重要である。

戦果に応えて感謝貯蓄

開戦した昭和十六年十二月八日に八八億円だった郵便貯金が翌年二月十一日には九三億円に達した。ただ、その九割以上が通常預金で払い戻しの容易なものである。今回の運動では戦時貯蓄にふさわしい定額貯金と積立貯金を、一戸で必ず一口は預けていただたい。

ヒマを栽培して奉公を

ヒマの種子から採れるひまし油は発動機を動かし、プロペラを回し戦車を走らせるのに必要な高級潤滑油である。その必要量はガソリン消費量の一五分の一と言われている。これまで輸入に依存してきたが、今後は極めて困難になってくる。幸い、全国各地で栽培が容易で、沢山の実を採ることができるので、庭や公園、空地などで積極的に栽培されたい。種子は市町村から部落会、隣保組を通じて配布する。

◆第三一一号（昭和十七年九月二十七日）

軍人援護を徹底的に強化しよう

十月三日から八日まで軍人援護強化運動を実施する。①常会で「銃後奉公の誓い」を朗唱しよう。②戦没軍人、出征軍人の家庭を訪問し慰問の挨拶を。③出征軍人に慰問袋を送ろう。なるべく食料品は避け新聞、雑誌、読み物、写真などが好ましい。

木炭の増産と消費節約を

極寒時には食料にも匹敵する大切な木炭を事欠くことのないよう、また凍傷と闘いながら皇国の守りについている将兵を思い、ひとかけらの木炭も粗末にしないようにしよう。

鉄や銅を供出しよう

大東亜戦争を遂行するためには大量の鉄や銅が必要なことは言うまでもない。南方には素晴らしい資源があるが、それが国内に入ってくるまでの間、国内の回収でまかなっていく必要がある。町内会、隣組などを通じて、金属回収統制会社に供出を。値段は昨年と同様。軍へ献納される場合も、同会社で受ける。

◆第三四九号（昭和十八年六月二十三日）

決戦下の服装を徹底しよう

衣類は新調せず、すべてあり合わせで済ますこと。やむをえず新調する場合は国民服とし、背広の仕立てはやめること。不用の衣類は隣保で融通交換し、修繕や作り替えをすること。

申告を正確にすること

配給の申告に人数を増やしたり、二重に申告するのは最も悪いことである。町内会、隣組では間違った申告があれば、直ちに直すこと。

食料の非常増産に邁進しよう

①不耕作田があれば部落の共同作業で、水稲耕作をやり遂げること。②河川敷、公園、緑地、工場予定地など、あらゆる空地を活用し、大豆、蕎麦、アワなどを作付けすること。③果樹園、桑畑などに大豆や蕎麦の間作を行うこと。

2「通風塔」

週報の最終ページに、毎号ではないが「通風塔」という欄がある。これは今でいう「読者の声」で、その時々の世間の風潮に対する意見が書かれている。官製の発行物であるので軟派な風潮に対する批判意見が多いが、戦時下であっても一定の自由

が許容され、規制が緩かった面も感じられる内容となっている。当時の市民生活の雰囲気を知る参考に紹介したい。

「真心こめた慰問袋を」（昭和十七年二月二十五日）

兵隊さんが一番嬉しいのは、銃後の我々が送る慰問袋だ。食べ物や慰問文を送ればその役割は果たせると思う人もいるだろうが、真の慰問袋は自分の手で作り真心を込めたものでなくてはならない。百貨店に行けば出来上がった慰問袋を売っている。手間が省けるというので買う。たとえ品物は買うとしても作ってある慰問袋を買うのは謹んでほしい。作って送ってこそ戦地の兵隊さんは励まされるというものだ。（東京都、男性）

「経済事犯に体刑を」（昭和十七年四月八日）

統制経済事犯には厳罰でのぞむと当局は言明したが、闇値や計量不足はあとを絶たない。これらの悪徳商人には罰金刑くらいでは改悛しない。罰金刑は覚悟の上での犯罪と思われる。罰金刑に体刑（拘束刑）を併科し、営業停止等の行政処分も行うべきである。（神奈川県、男性）

「日本字の横書き」（昭和十七年五月十二日）

新聞紙上で拝見すると、日本字を横書きする場合は、左より書くことに決まったようだが、週報はいまだ右から書いている。率先垂範すべき週報がどうして左書きにしないのか。

「米の配給量」（昭和十七年七月八日）

米の配給量は府県によって異なっているようだ。例えば三重県では成人一人一日三合に対し、和歌山県では二合である。その他の県でも、二合五勺から三合まで配給されているようだ。乏しきを憂えず、等しからず憂うだ。一億一心、団結するために全国一律の配給をお願いしたい。（和歌山県、男性）

「英字追放論」（昭和十八年一月六日）

町に家に、我々の周りには、ローマ字、英字が溢れている。特に看板や包装紙に甚だしい。大東亜共栄圏の人達が日本に来て、これを見た時、なんと感じるだろうか。英米の文化に支配された日本と見て、指導国日本に対する信頼が薄れるのでないか。町から家から、ローマ字、英字を追放し、本来の日本文字を使用しよう。（神奈川県、男性）

「休日を減少せよ」（昭和十八年一月六日）

我々、勤め人はあまりにも多くの休日を取りすぎのように思う。戦地の将兵に申し分けがない。決戦の今年の休日を次のように提案したい。①日曜休日を廃止し、十日、二十日、月末日を休日とし、各五の日を半日勤務とする。②四大節をのぞく祝日はすべて勤務日とする。（愛知県、男性）

「これが戦う国の首都か」（昭和十八年一月十三日）

公務で久しぶりに上京したが、ブラブラしている人間の多いことに驚きいった。軽薄浮薄な女子の姿は何事かと思う。倅に連れられて入った喫茶店では、同年代の者が、銃を手に戦っているというのに、頭をトンボのようにテカテカさせて、平然とコーヒーを飲んでいる様には腹がたった。決戦下の首都東京がこんなことでは困ったものある。七〇〇万都民の猛省を望む。（静岡県、男性）

「高級飲食店の絶滅」（昭和十八年一月二十日）

この戦時下に、高級飲食店、料理店が営業しているが、このような店を利用しているのは、ほんのわずかな人であろうと思

う。早い話、私ども、女、子どもには縁のない所だ。このような店は転業していただいて、それだけの物資を一般の飲食店や家庭に回していただいたらどんなに助かるかもしれない。

（東京都、女性）

「米英の呼称」（昭和十八年三月十日）

「米　窮迫す」とある同じ紙面に、「米を大切に」とあり、まことに煩わしい限りである。昔は知らず、彼らを敵とし戦っている今日。彼らを遇するに美称をもってする必要がどこにあろう。些事ではあるが、いまだ敵を憎むのに徹していない表れでないか。

（東京都、男性）

「我が方の損害」（昭和十八年三月二十四日）

開戦以来、皇軍戦士の勇勝に、ただただ感謝している。ところで大本営発表の戦果についてであるが、損害の扱いが戦果に比べて活字が小さいのが気になる。戦果と同様に扱い「この犠牲を忘れるな、この恨みを米英にたたきつけろ」の弁をもって、敵愾心の徹底を図るべきである。

（高知県、男性）

「酒を六時からに」（昭和十八年四月二十一日）

酒の販売は五時からとなっているが、時間前に行って並ばないと具合よく飲めない。決戦下の今日、まだ日も暮れぬ内から、大の大人がずらりと並んでいる様は褒めたものでない。そこで酒の販売は六時からにしたらどうであろう。そうすれば、勤め人は時間まで十分働いて飲めるし、明るい内から行列を作ることもない。

（大阪府、男性）

二、『家の光』の紹介

『家の光』は実に多様なテーマを取り上げているが、これらの中で、比較的、現代人の関心に通じる内容の多い昭和十二年三月号を、パラパラとページをめくり、読み飛ばしする感じで紹介する。

【表紙】

毎号、若い婦人の着色絵が表紙を飾る。一見、婦人雑誌のようだ（写真2）。

「大陸へ移動する花嫁」

満州の開拓村に嫁ぐため、夫になる人の写真を胸に出港する花嫁たち。「望みに燃える花嫁の元気な笑顔」とあるがさぞや不安でいっぱいであったと思われる（写真3）。

「皇室の御栄え」

現代の雑誌にもあるような皇室アルバム。右上が現上皇陛下、

写真2　表紙

写真3　大陸へ移動する花嫁

左上は昭和天皇の長子、輝宮成子殿下（写真4）。

「名士とその母」

戦前は皇后の誕生日（三月六日）が母の日であった。それを記念して、西條八十、東海林太郎などが母について語っている。西條は母を詩人と評している（写真5）。

写真4　皇室の御栄え

写真5　名士とその母

「漫画オリンピック」

一コマ漫画、四コマ漫画。公募した案をベースに絵を作家が描いている（写真6）。

「満州移民村訪問記」

開拓農家を訪ね開拓生活をレポート。寒さ対策、匪賊（ひぞく）対策の様子のほか、土木や建築、味噌醤油の製造、家畜飼育などを共同で行っていることを伝えている（写真7）。

「この母ぞ日本の宝」

厳しい母の教えに習い修養した歴史上の人物を紹介。頼山陽、渡辺崋山など（写真8）。

「各方面の試験官の座談会」

当時、話題であったと思われる自家用運転免許、産婆試験、飛行操縦試験、放送局試験、などについて、試験官が試験方法や裏話を興味深く紹介（写真9）。

写真6　漫画オリンピック

写真7　満州移民村訪問記

映画物語「女人哀愁」

その年に上映された映画をもとにした短編小説。好きだった従弟の男性を諦めて、親のすすめで結婚した女性が小姑のいじめに耐えられず、婚家を出て自活する話である（写真10）。

おわりに

祖父は私が生まれる前に亡くなったので、これらの本がある理由を直接には聞いていないが、新聞を読むのを日課として、近所の人が集まっているところに行き、読み聞かせるのが好きで、活字には抵抗がなかったようだ。また、農業の傍ら化粧品などの小間物を自転車に載せ、近郊の農家に日帰りで売り歩く行商を営んでおり、訪問先での話題づくりに読んでいたのでないかと思う。

写真９　各方面の試験官の座談会

写真 10　女人哀愁

戦後生まれの私にとって、戦前と言えば、終戦の昭和二十年を境に、隔絶された遠い昔というイメージが強かったが、市民生活の上では、戦前からの連続した日常の上に今日があることに、これらの本を読んで気づかされた。

戦時体制と平和な戦後の違いはあるが、今日と似た感覚で生活が営まれていたことがよくわかる本である。自宅の納屋にあり、祖父が読んでいたということもあり、自分の身近に戦前を感じる機会となった。

神戸深江生活文化史料館は、深江地区および周辺の阪神間の地域史の研究と情報発信を目的にされており、少し異例かと思うが、戦前の国民生活の一端を知る史料としてお役立ていただければ幸いである。

写真８　この母ぞ日本の宝

史料館この1年を振り返って

史料館にとってこの一年は近年にない変化と実りのあった年といえると思う。

◆財産区管理会との協議会設置

設置母体の財産区管理会と話し合う場を、協議会という形で明文化し制度化した。これまで、財産区の委員の方々と胸襟を開いて話し合う場があまりに不足し、意見交換をする場がなかった。言わなくても分かってもらえる、中身のある活動をしていれば理解してもらえる、と思い込んでいた。

思い返せば史料館を作った時の財産区管理会長の太田垣正雄さんは、村史の編纂を昭和十七年に着手した時の本庄村の助役。その後、昭和二十年の空襲で深江は焼け野原。村長代理として復興に奔走し、三十年を経て財産区管理会会長になった。村史に対する思い入れは誰よりも強かった。志井正雄さん、志井保治さん、岡田龍太郎さん、松尾福夫さん、深山健二さん、中尾久一さん、当時の委員はみなさん戦災でふるさとの焼失の悲惨な体験を持ち、歴史を記録することの大事さを言わなくても分かってもらえた。

でも今は違う。意味を丁寧に説明し理解してもらう努力が欠かせない。言わなくても分かってもらえるというのは、通用しない。協議会で顔を合わせて話し合う中で理解も進んだと思う。史料館の活動を財産区委員のSNSでPRしてもらえるなど、あるべき姿ができつつあると感じている。

◆ウクライナと深江文化村に焦点

展示も新たな展開があった。本誌で有吉研究員が報告しているように、今年度は深江文化村を舞台にした白系ロシア人やウクライナ人の存在に焦点を当てた。マスコミに取り上げられ、見学者も増えた。新たな寄贈品があった。第二次世界大戦中でも深江には白系ロシア人が居住し続けたという、新たな研究成果も生まれた。

前年に行った地域の方々や東灘高校の生徒たちとの「深江音頭」復元の成果も企画展示で続けた。例年なら恒例の季節展示に切り替えるところだが、それをしなかったのは、地域と歩む史料館でありたいと願ったからである。

またしばらくなかった甲南大学の博物館実習も久しぶりに実施した。予定していたところでできなくなったとのことで、役割を果たせた。

地域や大学との連携、新たな史料の発掘、新たな研究成果、そして発信と、理想的な展開ができた一年でもあった。

◆本庄港のスケッチ画寄贈

ふるさとの懐かしい風景を描き続けた御影在住の田中邦彦画伯（故人）の絵画をお嬢さんの山田良子さんから寄贈を受けた。昭和三十七年ごろの本庄港の風景画などが含まれている。失われた風景の記録としてこういう収集もあっていいと思う。令和五年度に企画展示を予定している。

◆予約図書サービスの現状

神戸市立図書館の予約図書受取や図書返却サービスも堅調だった。令和四年度（二〇二二）統計は、貸出冊数は月平均一二三五・六冊、返却冊数は一二九五・七冊だった。貸出を利用

した人数は、月平均四六〇・八人で前年の四四七・四人を上回り、利用者のすそ野が広がった。毎月の人数・冊数は表の通り。

令和四年度は新型コロナウイルスの影響はあったが休館はなかった。一月に神戸市のコンピューターシステムの更新のため全休したため、総数は過去最高だった前年度には及ばなかったが高水準を維持した。全休前の十二月は単月で最高の一五五〇冊、また再開後の二月は一七二二冊の返却があった。

（文責・大国正美）

2022年度図書貸出・返却実績

月	貸出人数	貸出冊数	返却冊数
4	453	1184	1259
5	437	1214	1280
6	418	1111	1139
7	528	1434	1536
8	432	1066	1060
9	387	935	1126
10	515	1372	1400
11	459	1321	1256
12	491	1550	1202
1	0	0	0
2	463	1130	1722
3	486	1275	1273
合計	5069	13592	14253
平均	460.8	1235.6	1295.7

史料館日誌抄

史料館副館長　道谷　卓

二〇二二年四月～二三年三月

〈二〇二二年〉

4月2日　企画展「東灘高生が選んだ　よみがえる「深江音頭」の風景」を好評につき延長（二〇二二年八月二七日まで）

5月27日　淡路景観園芸学校　（見学者　一〇名）

6月11日　神戸大学・甲南大学連携授業　（見学者　一五名）

9月3日　季節の展示コーナーを「中秋の名月」に展示替え（一〇月二二日まで）

24日　甲南大学学生一名、博物館実習のため受け入れ～一二月三日（五日間）

29日　東灘小学校三年生　（見学者　一四〇名）

10月22日　企画展「文化村今と昔の写真展　ウクライナ・ロシア友好の原点」展を開催（一二月二四日まで）

30日　兵庫県立歴史博物館友の会　（見学者　二三名）

11月22日　高羽六甲アイランド小学校三年生　（見学者　四〇名）

12月24日　季節の展示コーナーを「正月の風景」に展示替え（二〇二三年二月二五日まで）

〈二〇二三年〉

1月13日　本庄小学校三年生　（見学者　一四一名）

31日　福池小学校三年生　（見学者　一〇八名）

2月4日　東灘マイスターの会　（見学者　六名）

兵庫歴史愛好会　（見学者　六名）

25日　季節の展示コーナーを「ひな人形」に展示替え

資料寄贈者ご芳名

（敬称略）二〇二二年四月～二三年三月

森口健一／大国正美／永田美代／川口辰郎／田中裕行／浅岡俊夫／田中千尋／山田良子／中村司　（道谷　卓記）

『生活文化史』　第51号　2023・3・31
編　集／大国正美
発　行／神戸深江生活文化史料館
〒658-0021　神戸市東灘区深江本町3－5－7
☎　078－453－4980（FAX兼用）
http://fukae-museum.la.coocan.jp/